

新資料

山村暮鳥「小説『春』序文」(暮鳥会寄贈資料)翻刻と解説

竹 本 寛 秋

キーワード 山村暮鳥、翻刻、原稿、草稿、暮鳥会寄贈資料

本原稿は、山村暮鳥夫人土田富士氏の旧居解体の際に、新たに現つかり暮鳥会に寄贈されたものである。山村暮鳥の小説『春』は、新聞『いはらき』に大正一二年五月一日頃から大正一二年九月十日まで連載され、単行本化を目指したが未刊に終わった。本文については筑摩書房版山村暮鳥全集に収められているが、単行本のための「序文」の存在はこれまで知られていなかった。

『春』の単行本化については、出版所の幹旋を花岡謙二に打診した書簡のほか、荻原井泉水に託されたとみられる浄書稿、単行本刊行の不調を悔やむ山村暮鳥遺族宛荻原井泉水書簡、小川芋銭による『春』表紙装丁画、および、『春』背表紙装丁図案が現存し、具体的な出版準備が進んでいたことが推察できると、佐藤直樹・吉田佳代子が指摘している。本稿にて翻刻・紹介する『春』「序文」原稿は、新聞『いはらき』連載終了後、単行本化の作業が進められる中で書かれたものとみられる。

「序文」原稿は三種類存在し、それぞれ①山村暮鳥夫人土田富士筆の浄書稿、②山村暮鳥自筆の原稿、③山村暮鳥自筆の草稿となる。成立の時系列としては③→②→①の順に書かれており、①の浄書稿は、②の修正が反映されたもので大きな異同はない。③の草稿は三枚の原稿用紙からなるが、文言が重複する部分がある。実際にはより多くの

草稿が書かれ、②の原稿を作成するための材料となったと考えられる。本原稿は、小説『春』が単行本化にあたりどのようなテキストとして位置づけられようとしたのかを示す資料であるとともに、山村暮鳥の「土」に対する思想の解明につながる資料であるといえよう。

本原稿を含めた新出資料については、拙稿「山村暮鳥の自筆資料をめぐる ―草稿、創作ノート、説教メモ―」(『日本近代文学』第九二集平成二七年五月)も併せて参照されたい。

凡例

- ・漢字は可能な限り原稿の字体に従った。旧仮名遣いはそのままとした。
- ・注記事項は〈 〉内に記した。
- ・判読不明のものは■で示した。
- ・抹消部分は記載した上で取消線(――)を記載した。
- ・挿入部分は「」内に記した。語句の入れ替えについても同様に処理した。

① 浄書稿 (土田富士筆)

〈クジャク製原稿用紙 セピア罫 縦二〇横二〇 ペン〉
春の序文 (罫線外に書き込み)

序文

著者として

劈頭、ここに此の本をよんでくれる諸氏と「」自分の、ともどもに考えて見たい一事がある「」

ほかでもない。

それは、ひとびとが此の大地——土を、すっかり何處へかなくしてしまつたとおもへるほど、いつしか、餘りにも忘れ過ぎたといふことである。

土を離れて、どこに、何があるか。

その土のふところから飛びだして、そこに育ち、生活し、また、そのふところを永遠のふるさととして、その土をかけられなければ瞑目することのできない人間。そして萬物〔3〕

國家も社会も文明も、かうしてみると、すべてはひとしく、必竟、この土の蜃氣樓とすらおもはれる。

げに、不可思議なものは土である。その不〔可〕思議には底がない。だがまた、これほど平凡で、露骨で、實質的なものもあるまい。

土は喰へない、と云つてはならない。

ああ、無價であり、また價值以上である。此の土。

これほど世に古いものはなく、これほど新しいものがない。

これほどつまらない、そして冷酷なものもないが、また、これほど美と愛と健康とにみちみちたものもあるまい。

光明もそこにおいては死であり、闇もそこからでてくるときには花である。

そこは滅々〔1〕

そこは生々。

一切を、天空、海をすらも、その掌の上にながめよ。

さて此の土と人間生活との関係をおもへば〔2〕
なにはともあれ、その代表的な、また、その普遍的な存在として、誰の心にでもただちに描かれるであらうものこそ、農村乃至百姓のそれであらねばならない。

百姓は、まことに、土の靈である。

そのまぼろしである。

その正直正銘な世嗣である。

しかるにその眞實の土の子は、一体、どんな境遇にあり、そしてどんな望みをもち、どんな祝福と喜びと、くるしみと呪ひとをもちその劃線のない天真と不自然とのあひだにあ〔3〕

つて、いま、はたして、どんな生存にその日々を與へつつあるか。

自分は、この本で、それを研究しようとするのではない。

自分のつとめは、ただ、それを記録し、讀んでくれる人々に對してこつそりとそれを耳打ちする。それだけのことに盡きてゐる。

それでいいとおもふ。

なぜとなら、これは單に一個の小さな藝術の本にすぎないから。

とはいへ、百姓の子としてうまれた自分にとつて、この仕事は、なんといつても偶然でなかつたと同時に、これで、この肩の上の重荷をいくらかは軽くしたようにも感ずる。

茨城縣イソハマにて

② 自筆原稿

〈松屋製原稿用紙 セピア野 縦二〇横二〇 ペン〉

著者として

髯「髯」頭、ここに此の本をよんでくれる諸氏と「」自分の、ともどもに考えて見たい一事がある。

ほかでもない。

それは、ひとびとが此の大地——土を、すっかり何處へかなくしてしまつたともおもへるほど、いつしか、餘りにも忘れ過ぎたといふことである。

土を離れて、どこに、何があるか。

その土のふところから飛びだして、そこに育ち、生活し、また、そのふところを永遠のふるさととして、その土をかけられなければ瞑目することのできない人間。そ↓「し」一文字でニマス使用「」て萬物。

國家も社會も文明も、かうしてみると、すべてはひとしく、必竟、この土の蜃氣樓とすらおもはれる。

げに、不可思議なものは土である。その不可思議には底がない。だがまた、これほど平凡で、露骨で、實質的なものもあるまい。

土は喰へない、と云つてはならない。

ああ、無價であり、また價值以上である、此の土。

これほど「世に」古いものではなく、~~新しい~~、これほど新しいもの~~は~~「が」ない。

こ「れ」ほどつまらない」「そして冷酷な」ものもないが、また、これほど美と愛と健康とにみちみちたものもあるまい。

光明もそこにおいては死であり、闇もそこからでてくるときには花々である。

そこは滅々「」

そこは生々。

一切を、「天」空、海をすらも、その掌の上にながめよ。

さて此の土と人間生活との関係をおもへば「」なにはともあれ、その代表的な、また、その普遍的な存在として、誰の心にも「ただちに」描かれるであらうものこそ「」農村乃至百姓のそれであらねばならない。

~~百姓は、まことに、土の霊である。その、
群、れ、し、である。個々としての、その正直正銘
の世嗣である。~~

百姓は、まことに、土の霊である。
そのまばろしである。
その正直正銘の「な」世嗣である。

しかるにその真実の土の子は、一體、どんな境遇にあり、そしてどんな望みをもち、どんな祝福と喜びと、くるしみと呪ひとをもち「」その劃線々々「のな」い天真と不自然とのあひだにあつて、いま、はたして「」どんな生存にその日々を與へつつあるか。

自分は、この本で、それを研究しようとするのではない。

自分のつとめは、唯「ただ」、それを記録し、それ々々讀んでくれる人々に對してこつそりとそれを耳打ちする。それだけのことに盡きてゐる。

それでいいとおもふ。

なぜとなら、これは單に一個の小さな藝術の本にすぎないから。

とはいへ、百姓の子としてうまれた著者「自分」にとつて、この仕事は、なんといつても偶然でなかつたと同時に、これで、この肩の上の重荷をいくらか「は」軽くしたようにも感ずる。

茨城縣イソハマにて。(本行全体に「6」の活字指定)

③ 自筆草稿

① 〈松屋製原稿用紙 セピア罫 縦二〇横二〇 ペン〉
劈頭〈インクの違いから後の書き入れと見られる〉

辟頭、

ここに諸氏「此の本を~~見れば~~」^{ママ}「をよんでくれる諸氏」と、
自分の、ともどもに考えて見たい一事がある。
ほかでもない。

それは、ひとびとが~~世を~~「此の」大地——土を、餘
りにも~~わすれず~~「すつかり見れば」何處へかなくしてしまつた」
といふことである。

土を離れてな~~に~~があるか。

その土のふところから飛びだして、その掌
の上にて育ち、生活し、また、そのふところ
を「永遠の」ふるさととして、その土をかけられ
なければ瞑目することのできない人間、もし
て萬物。

國家も社會も文明も、かうしてみると、ひ
としく唯、それは、この土の蜃氣樓とすらお
もはれる。

げに、不「可」思議なものは土である。その不~~可~~思議

② 〈松屋製原稿用紙 セピア罫 縦二〇横二〇 ペン〉
健康で〈欄外書き込み〉可思議には底がない。だがまた、これほど平
凡で、「素」純で、現實的なものもあるまい。

この土と人間生活との関係をおもへば、誰

でも、~~世~~「なにはともあれ」、その代表的な、~~存在~~「存在として」また、
その普遍的なものの存在として、〈もの〉の上に「存在」が上書きされ
ている。」「直に」苗姓〈「姓」は女偏のみ書きかけ〉「農村」
乃至百姓のそれをめ~~は~~「心」に描くであらう。

~~世のまた~~百姓が、

そのまぼろしである

百姓は、まことに土の総領~~世嗣~~「靈」である。その
正しい~~■~~「~~な~~」「正直正銘な、」~~存在~~としての~~世~~世嗣である。

實~~■~~で、そして

しかるにその眞實の土の子~~世~~「~~は~~」「~~は~~」「が」、いま「は」、どん
な境遇にあるか。そしてどんな理想「望み」をもち、
絶望をもち、「どんな」「愛と喜びと」「~~世~~」か~~■~~「なし」み
と苦しみと~~世~~「をもち、」

「その劃線なき」天真と不自然「と」のあひだに
あつて「はたしてどんな」生存にその日々を與へつつあるか。

自分は、この本で、それを研究しようとする
のではない。

自分「のつとめ」は唯、それを報告「記録」し、~~世~~世界はわか~~世~~
れ~~世~~「それを~~世~~と読んでくれる人々に対して」「こつそりと」
「耳打」報告する、それ
だけのことに盡きてゐる。

それでいい。「おもふ。」

③ 〈松屋製原稿用紙 セピア罫 縦二〇横二〇 ペン〉
べてはひとしく、必竟、この土の蜃氣樓とす
らおもはれる。

げに、不可思議なものは土である。その不可思議には底がない。だがまた、これほど平凡で、悠久で、健康で、「露骨で」、魂實「質」的なものもあるまい。

土は喰[■]「へ」ない、と言つてはならない。

けれど、それがなければどうして生きてゆかれるか(以上二行は、空行に後に書き込んだと見られる)

これは「ああ」無價であり、また價値以上である。「此」の土。」

これほど古いものはなく、そして、これほど新しいものはない。

これほどつまらないものは「も」ないが
市もまた、これほど美しいものもあるまい。

花「生」もそこにあや「おい」ては死となり、死もそこ「か」らでてくるときには生である。

一切は「を、某」「空」「海をすらも、」その掌中「の」上「において」
ながめよ。(本行は空行に後から書き込んだと考えられる)
さて此の土と人間生活との関係をおもへば「」

そこは滅々

そこは生々(以上二行は欄外に書き込み)

1 山村暮鳥関係の資料について、混乱を避けるため、用語を整理しておく。「暮鳥会寄贈資料」は、二〇一一年に発見され、暮鳥会に寄贈された新資料群である。「暮鳥会寄託資料」は、土田家より暮鳥会に管理委託され、現在茨城県立図書館が保管している資料群である。

2 『山村暮鳥全集 第三巻』「解題」(筑摩書房 平成元年九月 六〇三頁)では連載開始日は確認できないとしている。藤原定は連載開始日を大正十二年五月一日としている(藤原定「編輯後記」『山村暮鳥全集 第二巻』(彌生書房 昭和三十七年七月 四八八頁)。

3 『山村暮鳥全集 第三巻』に収められている「春」本文は、暮鳥会寄託資料原稿(以下の①「春」原稿)に依っている。しかし、「春」の本文原稿は、現在確認できる限り、三種類存在する。

① 「春」原稿(暮鳥会寄託資料) … (文房堂製原稿用紙)

② 「春」手入稿(土屋文明記念文学館蔵) … 新聞「いばき」切抜にペンで修正、加筆

③ 「春」浄書稿(土屋文明記念文学館蔵) … (松屋製原稿用紙)

佐藤直樹・吉田佳代子は、筑摩書房版全本文と②「春」手入稿の掲載文を比較し、細かい語句以外の異同がほとんど見られないことを明らかにしている。このことから①「春」原稿は、新聞掲載のための原稿と考えられる。②「春」手入稿と③「春」浄書稿の関係についても、佐藤・吉田が比較を行い、③が②を元にした浄書である可能性が高いとしている。すなわち、単行本化に向けて新聞掲載本文に修正・加筆したものが②であり、②を元に原稿用紙に最終的に浄書したものが③ということになる。(この点については、佐藤直樹・吉田佳代子「所蔵資料紹介」『山村暮鳥「特別資料」——原稿類を中心に——』(『群馬県立土屋文明記念文学館紀要 風』第一八号 平成二七年三月 一六頁)を参照) 本稿で紹介する「序文」は③の原稿の成立と同時期か成立後に書かれたものと考えられる。

また、こうした本文の状況を考えるならば、今後、「春」本文についても、各原稿の詳細な比較検討と校異の作成が必要となる。

山村暮鳥 大正一一年六月二三日付花岡謙二宛書簡(『山村暮鳥全集 第四巻』(筑摩書房 平成二年四月) 七三七—七三八頁)

吉田佳代子編「山村暮鳥資料目録」改訂版「特別資料編」(『群馬県立土屋文明記念文学館紀要 風』一八号 平成二七年三月 四九、五四頁)、および、「山村暮鳥 資料目録」大手拓次「資料目録」(『群馬県立土屋文明記念文学館 平成一四年六月 三九頁)を参照。

前掲、佐藤直樹・吉田佳代子「所蔵資料紹介」『山村暮鳥「特別資料」——原稿類を中心に——』一六頁

附記 本稿の作成にあたり、暮鳥会、茨城県立図書館、群馬県立土屋文明記念文学館には、資料の利用をはじめ格別の配慮をいただいた。土屋文明記念文学館では、館長の篠木れい子氏をはじめ、佐藤直樹氏、吉田佳代子氏の協力を得た。深い感謝の意を表したい。本研究はJSPS科研費（課題番号：26370261）の助成を受けた成果の一部である。

